書　評

ジョイス・E・ソールズベリ著（後藤篤子監修・田畑賀世子訳）『ペルペトゥアの殉教――ローマ帝国に生きた若き女性の死とその記憶――』

豊田浩志

この翻訳の原著は今から実に二十年前のものである（Joyce E. Salisbury, *Perpetua's Passion: The Death and Memory of a Young Roman Woman*, Routledge, New York and London, 1997/10）。評者の記憶では、ジェンダー・フェミニズム的視点の論考が、とりわけ米国で雨後のタケノコのように簇生した時期が一段落したあたりで、評者の目に触れたその多くが牽強付会な解釈・叙述に充ち満ちていた中で、比較的地に足が着いた良書という印象を持ったことを思い出す。本書の最大の取り柄は、数少ない古代女性の肉声が保存された紀元三世紀初頭の『ペルペトゥアとフェリキタスの殉教伝』（以下『殉教伝』と略称）の、本邦初の丁寧な解説という点にある（但し、H. Musurillo 編訳［一九七二年刊］の邦訳はあった。「聖なるペルペトゥアとフェリキタスの殉教」土岐正策・土岐健治訳『殉教者行伝』『キリスト教教父著作集』二二、教文館、一九九〇年。以下、M版と略称）。本訳書により新たな読者を得る機会がもたらされたことをまずは喜びたい。殉教伝と聞いて敬遠する向きもあるかと思うが、この書には実在した女性の苦悩の声が等身大で記録されていて、しかも評者の視るところ現代と通底した話題満載なのである。

本書の著述目的は明確で、著者は「はじめに」で「殉教者はなぜ死が待ち受ける選択をしたのか」と問題提起し、それをペルペトゥア（以下、P）に焦点を当てて探るとする（但し、それが成功しているかどうかは別問題である）。続いて本書の要点が簡明に記される。二〇三年、乳飲み子を抱えた若い「ローマ貴婦人」Pは他の四人（内二名は奴隷）とともに逮捕された。父のたび重なる説得にもかかわらず、彼女は裁判でキリスト教信仰を告白し、皇帝への犠牲を拒否して野獣刑を宣告された。特筆すべきは、Pが獄中体験を「日記」に記したことで、こうして史上稀にみる女性の肉声が後世に残ることになった、と。続いて著者は本書骨子に言及する。まず第一章「ローマ」で、彼女の日常生活を取り巻いていたローマ文化に論及する。次いで第二章「カルタゴ」で、出来事の舞台となった北アフリカとカルタゴの伝統文化の背景を探る。第三章「キリスト教共同体」は彼女の思想・行動を育んだカルタゴの教会共同体の分析。それに続く二章で殉教物語の詳細に触れる。第四章「牢獄」では、彼女と彼女たち洗礼志願者の指導者サティルスが見た夢の分析が中心に置かれ、第五章「闘技場」で野獣刑の様子が詳述される。そして最後に第六章「余波」で、後世への影響に考察が向けられる。以下、著者の論旨を順次紹介しつつ若干論評するが、『殉教伝』に対する評者の見解はす

でに一応公表済みなので、詳細に興味ある向きは以下のHP掲載の論文等を参照されたい。http://www.koji007.tokyo/career/。

「第一章」　本章での主眼はPの家族関係である。実はそこでの解釈が後々に及ぼす影響はきわめて大きい。というのは、著者は古代ローマ人の一般論をPに当て嵌める論法をとっていて、ここにすでに問題が内在しているからだ（しかもここでの情報源は厳密には『殉教伝』を編纂した無名氏の編集句なので一層警戒の必要がある）。北アフリカ人の彼女をローマ的基準で潤色するのには幾重にも慎重であってしかるべきだろう。たとえば、彼女の姓名表記がウィビア・Pであることを根拠に幾世代にもわたるローマ市民家系としているが、あまりに安直。ただ彼女がせいぜい都市参事会員身分との指摘は、正しい。彼女はよき教育も受けていた。これには若干疑義があるが、まあよしとしよう。そして通例十代後半で結婚するところ、Pは「結婚したばかり」で（この証言は『殉教伝』にない）、数えで二十二歳、乳飲み子の男児を抱えており、当時としては晩婚だった、と。この認識も正しい。ところで彼女について研究者を悩ませてきた最大の疑問は夫だった。彼の気配が『殉教伝』でまったく伏せられているからだが、著者はそれを彼らの結婚が伝統的なマヌス婚ではなく、婚姻後も娘への父の保護権が残る形態だったのでと説明する。だが評者には、このような法的建て前では一向に問題の解決になっていると思えず、「Pは父親の認知外の内縁で子をなし、子の父はサティルス」との主張を提示ずみである。どちらが説得的かは読者諸氏の判断に委ねるとして、次いで著者は、ローマ人が他の諸民族に比べいかに宗教的に敬虔だったかに長々と触れる。空間毎に神々が定められていて彼らにふさわしい儀式を執り行う必要があり、Pはそのような環境の中でとりわけ母親の影響下で育てられていた、したがって彼女がキリスト教と出会った時、彼女の意識には古い考えがすでに刷り込まれていたはずだ、とも。このうち前段の論拠はすべてローマ人の一般的基準が援用されていて、評者には若干違和感があるが、後段の母親の影響等についてはその通りだと思う。

ローマが地中海帝国になったとき、特定空間に固着した神々では不十分になった。そこに登場したのが大神祇官職を兼ねていたローマ皇帝の〈事実上の〉神格化だった。それは家門の繁栄を家長に頼る姿勢とさほど違わず、先祖の守護霊と皇帝のそれの同一視でうまく宗教と政治を結びつけることができたからである。著者は、Pより三十五歳年長のセプティミウス・セウェルス帝（在位一九三～二一一年）が北アフリカ出身で最初の皇帝になっていく経緯をたどる中で、具体的にそれに触れていく。とりわけ彼が自らをエジプトのセラピス神に、妻を女神イシスに関連づけたこと、また二〇二年にユダヤ教とキリスト教への改宗を禁じた法令を発布し、アレクサンドリアでの殉教者の中にオリゲネスの父が、そしてカルタゴではPたちが犠牲となった、と指摘する。

当時の庶民のみならず教養人にとって天を地に少しでも近づける方法に、占星術と魔術があった。そこで著者が登場させるのが二世紀に生きたアルジェリア内陸マダウラ出身のプラトン主義者アプレイウスである。セウェルスといいアプレイウスといい、ここでの著者の人選は的を射ている。だがPと彼ら二名をつなぐ要となったのがイシス信仰だった、という著者の指摘は意想外で、

こうして二世紀末に「ローマの娘」として育ったPは、家長が犠牲を捧げる家庭の神々、皇帝を通しての世情の安寧祈願、そして密儀宗教の諸祭儀を身近に目撃していた、ただ娘たちの多くはイシス崇拝に従ったがPはイエスの神秘のほうを受け入れた、と論証抜きでの断定に走っていて、そこは性急な論の飛躍に思えてならない。

「第二章」　著者は本章冒頭であろうことか「Pは純粋にローマの娘であるというわけではなかった」（五九頁）と、直前まで展開していた論をずらしてPの北アフリカ性に重心を移しにかかる。このあたり評者には納得できない論理展開で、本来まず北アフリカがあり、ついでローマの影響を論じるのが筋ではないか。かくして著者は、カルタゴ建国神話、フェニキア人女王ディドー以降のビュルサの丘での発展、主神バアル・ハモンとその妻タニト、その人身犠牲の残酷さ、そしてローマ支配下での発展へと論及していく。だが「カルタゴは、単なるローマ市の模倣ではなかった。というのも、カルタゴとその住民は独自の伝統を維持していた」（七〇頁）。皇帝セウェルスの時代でさえポエニ語が使用され（評者はここをいわゆる「リビア・ベルベル語」と読み替えるべきだと考える）、文化的宗教的にも彼女はアフリカ的産物だったのである、と。ところで『殉教伝』原典はラテン語で書かれているが、はたしてそれがPたちの日常語だったのだろうか。著者を含め先行研究者はそれを自明としているが、評者はそうは思わない。多言語併用社会の北アフリカでは、Pたちの日常会話はリビア・ベルベル語で、それが『殉教伝』編纂段階でまずラテン語に翻訳編集され、次いでギリシア語訳されたと段階的に想定するのが自然と考えるからだ。

北アフリカは、なによりも穀物とオリーブ・オイルとワインの生産地だった。その農作業はそれから「少しの恩恵しか受けることのできない奴隷や小作農が耕作した」（七二頁）。彼らの労苦の上にPを取り巻く一族は快適な生活を享受していた。そしてこの富の果実を味わうべく、三世紀初頭までに北アフリカの農業地帯に約二〇〇の都市が点在していた。その豊かさを端的に示すのが豪華な舗床モザイクで、著者が注目するのは、個人宅の床に狩猟とか闘技場の血なまぐさい描写が好まれたことで、これはとりわけ北アフリカでは公の場で流される血に美と名誉を見出すのが顕著でその感性をPも共有していた（七四頁）、と断じる根拠となっているがどうだろう。

また著者はここで史料問題に若干触れる。それはPの生育地が本『殉教伝』の原典ラテン語版で明言されておらず、ギリシア語訳が彼女らの逮捕地をカルタゴの西五十三kmのトゥブルボ・ミヌスと伝えているからだ（研究者は通例カルタゴと推測。だがXIIIで登場の司教オプタトゥスを史料的にカルタゴ司教に確認できないので、そう簡単でない）。それがどこであれ彼女は裕福な環境に恵まれ、彼女らの裁判と処刑地はおそらくカルタゴで、そこには都市エリートが快適に過ごす文化・教育的施設が完備していた。ここで著者が傍証で登場させるのは、またもやアプレイウス、そして二世紀後の内陸タガステ出身のアウグスティヌスである。この文化都市カルタゴで魅力的な催しに演劇があった。著者は「一般的なことを言うのは容易だが」「影響の本質を正確に知ることはできない」（七八、八二頁）と一応釘を刺しつつも、結果的に、

とりわけヘレニズム小説がPに決定的影響を与えていたと熱弁する。著者は言葉について、二、三世紀においてラテン語とギリシア語、それにポエニ語が話されていた、そしてアウグスティヌスの時代までにギリシア語は使われなくなるが、彼女の知的経験にギリシア語が与えた影響は大きかったとして、ここでPが読んだはずの若い男女の恋物語のヘレニズム小説の特徴に触れる。第一に家長の意志が絶対だった当時の社会通念に対し若さの暴走を称賛する気風、第二に伝統的な控え目な役割でなく勇気と機知で行動する女性の登場、そして最後に試練に耐え抜いた男女の精神的な恩恵を付加したハッピーエンドである。それは確かにフィクションに過ぎないのだが、それあってこそ人は前に前進することができる、確実に彼女はこういった小説から影響を受けていた、と。この視点は人間心理を突いていて面白かった。

さらに著者は、カルタゴにはその繁栄と裏腹に深刻な不安も存在し、それに打ち勝つために個人的犠牲が求められたとして、流血が共同体の存続や個々人の救済のために支払わなければならない対価で、その具現化としてフェニキア、ディドー、旧約聖書、カルタゴのトフェト、バアル・ハモン神への人身犠牲の事例を列挙する。そして自己犠牲の極致としてローマ時代のカルタゴで供犠自殺が魅力を発揮していた、とこれも次々列挙し、神々の祭壇での人身供犠こそ禁止されていたが、別の形で継続されていたとして剣闘士競技に話題を振る（八八～九三頁）。かくして「Pはこうした供犠や犠牲的自殺の物語を聞いて育った。カルタゴ人にとって大義のために死ぬことには深く根づいた価値があった」（九三頁）と結論する。こういう論法は評者にはいささか短絡的に思えてならない。そもそも当時のカルタゴ人の大半、否キリスト教徒にしても決してPと同一行動をとらなかったことにどう反論するのだろうか。またそのような傾向が伏流水的にあったとして、それが噴出した契機、彼女の行動の特異性こそが問題とされねばならないはずだ。

「第三章」　たぶんそれもあってだろう、著者は上述のようなカルタゴの多様な思想との出会いでPがなぜキリスト教信仰に惹かれたのかに論を進める。まず著者は、カルタゴ教会の起源を東地中海からの幾波にもわたるユダヤ人の移住に見、とりわけギリシア語を話すユダヤ教シンパの異教徒「神を畏れる人々」からキリスト教への改宗者が出てきた、とする。それは納得できても、R・スターク（一九九六年）に依拠して、Pの生きた三世紀初頭に帝国内のキリスト教徒二十二万弱（全人口の〇・五％）、カルタゴ人口五〇万に約二〇〇〇人と見積り、その大部分が都市居住だったので、すでに無視できる数ではなかったとみなすのは（一〇〇頁）、統計学的閾値からみて大甘な算定といわざるをえないだろう。

著者はさらに、なぜ人々がキリストを選んだのかの解明には、キリスト教徒集団に目を向けなければならないとして、奇跡的治癒や異語や預言に注目する。それらは当時の多神教徒やユダヤ教徒にとっても信仰の真実性を立証し、恍惚体験・トランス状態を目撃することで、その集団に霊的賜物が存在したことを納得させることができ改宗の重要な契機となったからで、これは当時のキリスト教でも同様で、そこでは女性にも指導者への道は開かれていた、そしてPが見た幻視からして、彼女は明らかに共同体内で

それなりの指導力を発揮していたとする。評者にとり最も読み応えがあり大筋で納得できたが（但し、キリスト教の優位性の立証にはまったくなっていない）、最後の件はまだ洗礼志願者の彼女には過大評価ではないかと感じた。もっとも、日常生活に安住している信者より、志願者のほうが万事に意欲的という一般的傾向を否定するつもりはないが。

実際のところ、霊能者は共同体に混乱と不和を持ち込む元凶だった。著者はそれにも目配りを怠らず、いずれ別の権威すなわち教会位階聖職層に依存せざるをえなくなるとして、Pをその狭間に位置づけていて、これは納得できる。しかし著者は、Pがもう一つの分断、伝統的な血縁的家族関係に亀裂を走らせ、教会共同体における「父と子供たち」「兄弟姉妹」という新しい家族関係を構想したとして、その裏打ちとなった新倫理にキリスト教諸史料を根拠に、困窮者の支援と嬰児遺棄の禁止、さらに愛敵を列挙するのはどうだろう。著者もさすがに最後のそれの達成度は疑っているが、その著者がどうして他は無批判に受け入れてしまうのか評者には疑問である。教会著述家が理想としてプロパガンダしていた言説をそのまま現実と鵜呑みにすべきではないからだ。そもそも信者といっても新約時代から多種多様で決して一枚岩ではなかったし、事実はむしろ逆で、キリスト教がセクトを脱し大衆化への道を歩み始めていたからこそ、信仰弛緩への警句として発せられた叱咤激励のスローガンと読むべきなのである。

さてこのあたりから著者は『殉教伝』叙述の具体的検討に入るが、これまで以上に翻訳と解釈が評者と異なってくる。関心ある向きには拙論をご参照願うとして、紙幅の関係で今は決定的に重要と思われるⅡ・3の最後の一文のみに触れる。まずこの箇所は編纂者の編集句であることに注意しておこう。さてM版の英訳では版本的根拠がないにもかかわらず（即ち、ラテン語原文ではカッコはない）この箇所をなぜかカッコで括り、著者と邦訳者もそれに準拠し「（ここからの彼女の試練の物語はすべて彼女自身が、彼女の考えに従い、彼女自身が選んだ順序で書き記した通りである）」（一二五頁：以下、傍点は評者）と訳す。土岐訳は底本をM版に依拠しているが、当然のことカッコなしで「Pその人が、自分の受けた殉教の顛末を、直接自分の手で書いたかのように、すべて順序立てて物語り、自分の意志で（我々のために）残したのである」として、拙訳「彼女は彼女の殉教のすべてを……自ら物語った。いわば彼女の手で、そして彼女の意志で書き付けて残したのだった」に近い。M版および著者・邦訳者と、土岐および豊田の訳の違いは、P自身が直接ラテン語で書き記したのか、そうではなく物語っただけで（土岐ではラテン語で）第三者ないし編纂者が（豊田では、おそらくリビア・ベルベル語をラテン語に訳して）書いたのか、にある。本『殉教伝』中で第二の重要登場人物サトゥルスの場合、彼は「自身の以下の幻を述べた。それを彼自身が記した」としている（Ⅺ・1）。よってこの件での軍配は、編纂者の意図的改竄の可能性を含めて、我にあると確信しているが、多くの先行研究者は「P自身が書き記した」を自明のように採用してきた。この一事をもってしても『殉教伝』全体の構造把握に決定的に重要な文言に、著者を含め研究者が意外に無頓着なのには驚かされる。

「第四章」　収監された環境は乳飲み子を抱えたPの目には最

悪であった。だが袖の下で牢番を籠絡し差し入れもしばし寛ぐことも可能となる。ここでの乳飲み子をめぐっての葛藤や、夢による幻視の内容や解釈に関しては、すでに私見を開陳済みなので繰り返さないが、それは著者が強調してやまない父親や現世の家族制度との絆を断ち切る方向（一四〇頁）にではなく、むしろ捨てたはずの血縁家族に依存せざるをえないPのジレンマに、中世聖人伝的な紋切り型に修正以前の、生身の葛藤を読み取ることができて貴重、と評者は考える。

「第五章」　驚かされるのは、『殉教伝』の検討に入る前に著者は本章の半分以上を当時の見世物・闘技場の意義・解説に費やしていることで、読者はここで予期せずそれに関連する高度な知識を吸収できる。邦文でこれだけ目配りのよい叙述を評者は知らない。しかも、全般的に本書に批判的な評者にとってすら、ここでの『殉教伝』解釈は細部はともかくとして妥当で、その意味で安心して読めた。

「第六章」　様々な論点から彼女たち小集団の歴史的意義に触れる。カラカラ帝の市民権付与で迫害の全体構造が変化し、キリスト教内での信仰の緩みに憤激したテルトゥリアヌスたちは「新預言主義」的傾向を顕著にし出す（著者は、彼に同情を感じずにはいられない、とさえ表現している。二四五頁）。しかし時代は衰退期北アフリカにおいて富裕な新改宗者たちの世界となり、その象徴的人物がカルタゴ司教キュプリアヌスだった。当然のこと彼らは来たるべき厳しい試練に対応できず、大量の棄教者と深刻な内部分裂を出来させる。そして登場するのがアウグスティヌスで、アレイオス派ヴァンダル人侵入、イスラームの占領と続いて、彼が心血を注いだはずのキリスト教間の論争など霧散してしまう結末を迎える。

著者はその後、なぜか聖遺物崇敬の話題に踏み込み（二五六～二六二頁）、当時のおどろおどろしい信仰実態を明らかにした後、本『殉教伝』が時代の教会に都合よいように改竄と注釈で塗り込まれて行く様子を、アウグスティヌスを主軸に活写する。しかしPの生々しい言動のインパクトは抹殺されることなく生き続け、彼女の記憶は決して失われはしなかった、と本書を結ぶ。

最後に、いささか残念な点に二、三触れざるを得ない。それが本誌から書評を求められたとき、今さら女性史に男が出る幕でもなかろうと一度は躊躇し、しかし思い直した理由でもある。著者は、英語圏の一般読者にすら「彼女は古典学者といえない」と指弾される記憶間違いを犯したり（Customer reviews, December 4,2000, Amazon. com：その誤記二点は邦訳では修正済み）、文献解題で出版年をリプリント年で掲載するなど結構杜撰なところがあり、また註記での史料典拠を英訳本の頁数で済ましていて、評者はストレスを強いられた。たとえば一一八頁の註（97）で、「Tertullian, “Apology,” 99-100, 106」としているが、これだと確認がやたら手間で、「39. 6, 42. 1」と章・節で表記してくれれば一発なのだが。

邦訳はよくこなれていて読みやすい。そのために邦訳者は多くの時間を費やしたはずだ。著者の間違いも数カ所修正している。しかし重箱の隅をつつくようで申し訳ないが、ミスがないわけではない。冒頭部分に限っても、註（2）の位置が一文ずれたり（一六頁）、六八頁でcolumnsを「円柱」としているが、遺跡写

真を見れば一目瞭然のことだが「(土留めの)支柱」とすべき、云々。文献一覧で(そして註記でも)、邦訳書を並記する労多き作業をされていて有意義だが、管見の限り少なくとも一〇以上見落しがある。専門家には周知とはいえ一般読者のために是非再版の機会に付加してほしい。

最後に評者がもっとも残念に思ったのは、これほどのよき啓蒙書の我が国への紹介というせっかくの機会に、監修者ないし邦訳者による解題がない点である。ジェンダー・フェミニズム史学にしても、すでに現在まで半世紀を経た歩みの中での本書の位置づけ、さらには問題点にも簡単でいいから触れてほしかった。なにしろ本『殉教伝』は古代における女性史にとって類い稀な重要史料なのだから。本書の出版後も注目すべき研究書が次々と上梓され、その上最近なんと世界に冠たるOxford UPからコミックを加味したものさえ出版された。このように相変わらず本『殉教伝』に熱い視線が注がれ続けていることを報告して、舌足らずの小文を閉じたいと思う。

(四六判　白水社　二〇一八年八月
三四四頁　税別五四〇〇円)

(上智大学名誉教授)